

# 青年指導と雄辯

加藤咄堂

## 一 青年指導の根本

私は昨年も参りまして話を致しましたが、雄辯の原理はさう昨年と今年と變つたものではないのであります。殊に之を詳しく話しますと、私、東洋大學で雄辯法を一年話したのであります。その位掛かるのであります。要點といへば二時間でも三時間でも話せるのであります。それは昨年も大體申してしまつたのであります。昨年の題は「聽衆と演者」といふ一般的なものでありましたが、今年は「青年指導と雄辯」といふ題を與へられて居るのであります。

### (一) 學識

併し青年の指導といふことが雄辯といふやうな技術的なことでやれるかやれないかは自から別な問題に屬しますが眞に青年を指導するものは思想であり人格であるべき筈であります。如何に巧みに喋りましても雄辯といひ話術といふものは思想傳達の手段でありまして目的ではないのであります。丁度文章が思想を傳達して感情を傳へるの手段であつて目的でないやうに、雄辯も手段であつて目的ではないのであります。如何に喋りましても、その指導の目的が達せられなければ何の役にも立つべきものではないのであります。青年を指導する根本は思想であり人格であるので

あります。思想として價値があるならば是で指導は十分に出來やうと思ふ。如何に巧みに喋りましても、その思想そのものが無價値であるならば徒に青年の嘲笑を招くに過ぎないと思ふのであります。故に青年を指導するのにはその思想が根本であるといふことを第一に御考を願つて置かなければなりません。同時に人格も大事であります。沈黙の英雄が能く青年を指導して居るのは歴史的にも吾々多く見得る事實であります。西郷南洲先生が雄辯家であつたことは聞きませぬ。併ながら南洲先生の「よか、やれ」と言はれた一語で薩内一萬の健兒は指導せられたのであります。人格が根本である。雄辯は人格より流露したものでなければならぬ。人格から逆り出たものでなければならぬのであります。併し人格の問題は修養の問題としあ別に講習せらるべきものであります。これは別と致しまして、先づ思想、といふ點から考へましても、青年の時期といふものは幼年時代のやうに總てのことを傳統的に處理し得る時代ではないのであります。自我の意識といふものが發達致しまして、何等も言はれた儘にあゝさうかと承服して行くものではないのであります。一切の事を批判的態度、自分を中心として批判せんとする傾向を有つて居るのは青年心理の一特色であります。故に青年期は生意氣であり理窟っぽいと言はれる程總てを合理的に見んとするの傾があるのであります。でありますから、青年指導の思想は合理的に表現せられなければならないといふことを先づ申して置かなければならぬのであります。だから年寄が自分の傳統的の思想を以て、青年の合理的に批判せんとするのを頭ごなしに、それはいかぬ、それは以ての外だといふやうな言葉で排斥し去るべきものではないのであります。例へば左傾青年を指導して行くのに付きましては、その青年、有つて居る思想體系よりも優れた思想體系を指導者は有つて居らなければならぬ。青年の有つて居る思想體系の如何なるものであるかも知らずに、唯頭ごなしにその結論だけを聞いて之を排斥し攻撃するやうなことでは青年の思想は指導し得るものではないと思ひます。故に青年指導の第一義はその指導

者がその言はんとする問題に於てはその青年に優越したる學識を有つて居らなければならぬ。是なくして唯話術を研究した雄辯の方法を研究した、といふだけで青年を指導しようといふやうな間違つた考を有つて居るならば、それは青年を誤るも甚しきものであると考へるのであります。故に總てのこととに付て知ることは出來ませぬが、その自分の言はんとする問題に付ては青年より優越して居る思想、學識を有つて居らなければならぬ。雄辯は栗の實のやうなもので、栗の實は内に實が熟すとパンといがが破れて行くのであります。思想を内に充實せずして外に破れて出づべきものではないのであります。だから自分の學識といふことは、是は第一に御考を願つて置きまして、青年指導者は斷へざる研究者でなければならぬ、又斷へざる修業者でなければならぬと思ふのであります。蓮如上人の言葉にも、是は宗教のことありますけれども、信仰を説くのに自分に信仰なくして人に信仰を奨めるのは物なくして他に與へんとするが如きものであると申して居ります。何も自分は有たないで、貴様に之をやる之をやると言つたつてやれるものではない。先づ自分が有つて居らなければならぬ。故に私は第一に學識といふことを御記憶を願ひたいと思ひます。

## (二) 見 識

併ながら學識だけならば書齋に引籠つて居る學者でも宜いのである。又大學の先生でも宜いのであります。けれども青年を指導せんとする者はもう一つ要件が要ります。即ち見識あります。學識のみならず見識といふことが必要であります。詰り青年を指導して如何なる地點に導くべきかといふ見識がなければならぬのであります。世の中には學識があつて見識の乏しい人があるのです。それは學者としては尊重すべきものであります。又字引としては尊ぶべきものであります。併ながら今青年を指導するといふ點に於ては見識といふものを一つ立てゝ行かなければならぬ。この見識を立てるのには様々の方法があり、様々の見方がありますけれども、兎に角その時代といふ

ものを能く見て行かなければならぬ。この時代を如何に導いて行くか。現實の青年の狀態をどう進めて行くかといふことである。昨年も私申したのでありますけれども、時代といふことに於て教化とか指導とかいふことを言ひますが、先づ第一に時代後れであつてはならぬといふことを申上げて置かなければならぬ、千九百三十五年と申しますが、皇紀二千五百九十五年の今日を昔の儘に戻さうといふやうな思想は果して青年を導くべきものであらうか。老人といふものと青年といふものの心理は其處に違つた所があるのであります。青年には愛新性と申して新しいことを好む性質がある。老人は憎新性と申しまして新しいことを嫌がつて傳統的のことにつれては憧れを有つといふ心理であります。青年の二つの頬には希望と微笑があります。老人の眼には追憶の涙があるのであります。だから青年は是から後、今に見ろと言つて前途に憧れを有つ。老人はどうも是から見ると云ふその是からがない。そこで俺の若い時分は、とかう來るのであります。どうしても追憶的であります。故に青年を指導して行くのは、前途に光を認めさして行くといふことが必要であります。それが時代後れの考では前途に光が見出し得ない。然らば時代に伴つて行けば宜いか。時代に伴ふといふことは現實に應同して行くといふことであります。現實に應同して行くなら指導も要らぬし教化も要らぬやうに思ふが、先づ現實を理想として行くのであるから、青年指導者は時代に先立つて行く所の先見の明がなければならぬ。是が見識の一つであります。この時代がどうなつて青年を如何に導くべきかといふ先見の明がなければならぬのであります。

### (三) 常識

併ながら見識だけで青年の指導は出来るものではないのであります。如何に見識が宏遠でありますても、それが現在の社會に即して行くことが出来なかつたならば指導は出來ないのであります。故にその時代の社會通念か如何なる

ものであるかといふ、この社會通念を十分に知つて、それから出發して導いて行かねばならぬのである。故に學識、見識の外にもう一つ青年指導に要るものは常識であります。學識、見識、常識、この二つが備はれば鬼に金棒で完全であります。縱し完全に至らずともその三つも必要であるといふことは認めて置かなければならぬ。といふのは如何に時代に先立つ先見の明がありましても、それが餘り先過ぎては青年を導いて行くことは出來ないのであります。人間の目は高く天を見るることは出來ても足は地面を離れることは出來ませぬ。人の目は百里の先が見えても一足づゝしか歩むことが出來ないのであります。故に自分は高遠なる理想を有つて居つても、それを現實の卑近なる狀態に引下げて導いて行くといふことが一番必要なのであります。昨年も申しましたが、西洋の諺に「旅行の目的は同一起點に歸るにあり」起點といふのは出發點であります。例へば東京から京都へ旅行するとする。京都迄行つて東京へ歸つて來て初めて旅行の目的は達するのである。京都へ行き切りでは旅行ではない。それは移住したのであり、移轉したんであります。一遍戻つて來ることが大切である。指導者は高遠なる理想を掲んで、その理想を現實の青年の所へ持つて來て初めて現實を導くことが出来る。自分が遠い所に離れて居つて、來い來いと言つたつて行かれるものではない。案内者は何時でもその人と餘り遠く離れてはならぬのである。故に宏遠の見識でも之を常識の所へ持つて來て説明しそ行かなければ青年を指導することは出來ぬのであります。でありますから、青年を指導する者は一つは合理的であると共に、又青年時代といふものは何に於きましても憧れを有つて居るのでありますから、そのかうありたいと望む所へ進めて行くことが必要であります。故に私はかう言ふのであります。合理的でなければならぬといふことが一つそれから今一つは希求的でなければならぬといふことであります。合理的といふことはかうあるべき筈である。希求的といふことはかうありたいといふことであります。而して次に必要なことは實現的であります。かうあり得べき

ことであります。青年時代といふものは思想と行動との距離が短いのであります。老年になりますと、色々な原因がありまして、さう言うたからとて中々出来るものではない、そんなことは出来るものではないなどと言ひます。併ながら青年時代は是は良いと思つたら直ぐにそれを行動に移さんとする傾向がある。経験の之を顧慮せしめる間隙が少いのであります。でありますから餘り空想的な事でありますと青年を誤るのであります。現實に應同して實現し得べきものでなければならぬ。合理的、希求的、實現的、この三つを標準と致しまして青年指導の思想を堅めて行かなければならぬと思ふのであります。併し是等の思想に付きましてその一々を話しましても多くの時間を要するのであります。今日私に與へられたる問題は青年指導の問題ではない。「青年指導と雄辯」といふ問題であり、諸君の又聽かんと欲するもその所である。故に思想のことは略して置ますが、さういふ思想が立ちましても、是が他に傳達されなければ指導は出來ないのであります。如何に自己が思想をば内に蘊蓄して居りましても、それが流露して出なければならぬのであります。その思想を有效に傳達するはどうするか。この有效に傳達するといふことに於て茲に雄辯の問題、話術の問題が起つて來るのであります。

## 一一 同じ思想で上手下手があるので

### どういふ譯か——材料の問題

そこで私共はかういふを見ようと思ふ。例へば同じ思想を有つて居る人が演説を致します。或は講演を致します。同じ思想を有つて居る人がやるのに、甲の人がやると巧く出来るが、乙の人がやると巧く行かぬといふことがあります。

る。それは何處に差があるか。同じ思想で、例へば異多いことであるけれども、勅語普及なら勅語といふ點に於ては甲の人の考も乙の人の考も同じである。所が甲がやると感銘するが、乙がやると感銘しないといふのはどういふ譯であるか。その第一に數へられるものは材料の善し悪しである。同じ思想を表現致しますのにも、その話材の善いものを有つて居ると感銘する。所が話材が不適當であつたり、資料が足らなかつたりすると人を感銘せしめるものではないのです。

そこで又問題が起る。そんなら同じ思想で同じ材料を有つて行けば誰でも同じやうにやれるか。所が同じ思想で同じ材料を有つて居つても、甲の人人がやると乙の人がやると上手下手がある。それは何故であるか。組立の工合の善し悪しである。組立の善い悪いとでは餘程違つて居る。同じ一つのことを言ふのでも、前に言ふ事柄を後で言ふのと、後で言ふのを前に言ふのとは違ふ。是又昨年も言ひましたが、一番分り易いのは、下女が居眠りをして困るといふ此言を言ふにしても、どうもお前は能く働いて呉れる、内にも色々是まで女中が來たけれどもお前程能く働くのはない。内は朝は早いし夜は晚くて無理はないけれども、居眠りだけは止めて呉れと言ふと成程と利くのであります。所が之を逆に言ふ。お前のやうに居眠りしては困るから居眠りは止めて呉れ。内は朝は早いし夜は晚いけれども……是はどうなるでせう。同じことだけども、朝は早いし夜は晚くて無理はないけれども——と同情して呉れるなと思つて居る——そこへ居眠りだけは止めて呉れ。成程と分る。お前のやうに居眠りしては困ると叱り付けると聽く者が反抗的になる。其處へ、無理はないけれどもと言つても是は入らない。だから長い話の中、先づ聽衆の同情を引いてばつと入れるか、或は最初に反抗させてしまつてから入れるかは話の順序に依つて決つて行くのであるから、そこで組立が關係するといふことが分つて来る。そんなら更に考へる。同じ思想で同じ材料で同じ組立なら皆同じに行く

か。否。言語に依つて違ふのであります。同じ材料、同じ組立を使つて居りましても表現する言語、言葉の使い方に依つて新しくも聽かれゝば古くも聽かれ、感銘深くも聽かれゝば感銘薄くなつてしまふのである。そんなら同じ思想で同じ材料で同じ組立で同じ言語——詰り同じ原稿を有つて居つて講演し演説をするのに、甲の人がするのと乙の人がするのと非常に上手下手がある。是はどういふ譯であるか。能く政黨が選舉の折なんかに、應援辯士には同じ原稿を渡して置く。所が甲の人があると巧いが乙の人があると拙い、どうも感じないといふことがある。同じ思想で同じ組立で同じ材料である。同じ原稿でもさういふことがあるのはどういふ譯か。是は分り切つたことである。同じ臺詞を言ふのにも上手な役者が言ふ折と下手な役者が言ふ折は違う。上手な役者だからといふので臺詞を變へたのではない。又下手な役者だから臺詞を變へたのでもない。もつと的確に言へば、淨瑠璃語りのあの原稿——原稿とは言はずせうけれども、あれは同じものである。所が上手な人が語ると涙を流して聽いて居る。下手な人が語ると涙をさらして座つて居る。是はどういふ譯であるか。是に於て音聲といふ問題が起つて来る。同じ原稿でありましても聲の揚げ下げ、或は聲の幅、それに依つて變つて行くのであります。然らば同じ人が同じ演説を甲の所でやつた場合は成功し、乙の所でやつた場合は成功せぬといふのはどう云ふ譯か。即ち聽衆と演者との關係、その演説する人の氣分の關係、會場の關係、是等も亦考究せらるべき問題であります。そこで同じ思想を表現するのに何故上手下手であるか。同じ材料を有つて居つて何故上手下手があるのか。同じ組立を有つて居つて何故上手下手があるか。同じ言葉を有つて居つて何故上手下手があるか。同じ原稿を有つて居つて何故上手下手があるか。同じ人於て何故上手下手があるか。この六點を中心として話を進めて行きたいと思ふのであります。

先づ第一に同じ思想を有つて居つて上手下手があるのはどういふ譯であるかと言ひますと——是は材料の問題であ

ると思ひますが、材料を選びますのには三つの觀察點があるのです。どんな材料を用ひれば平易に話すことが出来るか。どんな材料を有つて行けば興味あらしめることが出来るか。どんな材料を有つて行けば感銘を深からしめることが出来るか。この三つであります。と申しますのは、個々の人々でなくして集團的に青年を集めて講演を致します場合、そこには知識の差があります。この知識の差がある上で考ふべきことは、知識の低度の低い人に分る話であるならば知識の高い人にも分る話である。そこで青年指導の標準は、集團的に集めてその中の知識の一一番高い人を相手にするか、低い人を相手にするやうに材料を決めるかといふと、それは數にも依ります。低い人が非常に少い場合とか或は高い人が少い場合といふことにも依りますが、成るべく平易に分り易くするといふ材料を用ひるならば、低い人に分ることなら高い人にも分る。知識の高い人に分ることは低い人に分らぬこともある。だから學者と共に考へ俗衆と共に語れ、考へるのは學問的に考へて、話をするのは一般大衆に分るやうにするといふのであるから、どうすれば分り易い材料があるかといふことを考へなければならぬ。もう一つは専門は學校教育と違ひまして、社會教育と致しました場合には、その大衆たる相手の人々は聽かねばならぬ義務を有つて居らぬのであります。責任がないのであります。嫌なら何時でも出て行くことが出来る。それを惹付けて聽かすのには面白味がなければならぬ。どうすればその興味が附けられるか。興味を附けて行くのにはどういふ材料にするか。更にもう一つ考ふべきことは、分つた、面白かつたといふだけでは青年指導の目的は達せないのでありますから、そこで感銘を深からしめなければならぬことになる。成程、あゝ言はれた通りである、あゝや、らうといふ所までに行くのには感銘を深からしめなければならぬ、演壇の下で聞いて居る間は相手して聽いて居つても、一步會場の外へ出れば忘れてしまふやうなものは役に立たぬ。それを何時までも感銘せしむるのにはどういふ材料を使へば宜いか。この三點を標準として話の材料、演説の

資料を探して行かなければならぬ。それ等の資料となつて最も効果に働くものは何であるかと言ふと譬喩であります。

### (一) 明 喻

譬喩といふものは二つのものを同時に言表はして一つの分らない方を分らせて行くのであります。二つのものを同時に言表はして混雜することなく、分る方に依つて分らぬ方を分らせて行くのが譬喩であります。例へば心と言ふのに、唯々心、心と叫んでは分りませぬから、心は鏡のやうなものである。即ち心と鏡と二つのものを言うて、知つて居る鏡といふもので心を考へさせる。さういふのが譬喩であります。即ち既に明かなることに依つて未だ明かならざることを言表はして行く。是が譬へであるといふことを明かに申して材料に使ひますのを明喻と申します。例へばかういふ譬があるといふやうなのは明喻であります。諸君がクリストのバイブルを御覽になりましても、至る處に譬喩があることを見るでせう。孟子を御読みになりましても、論語を御覽になりましても譬喩が澤山ある。佛教の如きは譬喩經といふお經が出来て居て譬へが集めてある位非常に多い。といふのは無形なことを言ふのには、千言萬語を費しても分らぬことでも譬喩を以てやれば納得せしめることが出来るのであります。そこで精神上のこととを説かれた古來の聖典には譬喩が多いのであります。否、譬喩なくしては分り易く、若くは興味あらしめて人に聽かしめることは出来ないのであります。

例へば人間の世の中は前途に希望を懷きつゝ遂に死んで行くのである。是で分つて居るのであります。けれどもはつきりは分らぬのであります。そこで丁度人間の世の中は汽車に乗つて旅をするやうなものである。例へば今東京驛から汽車に乗つて大阪まで行くと假定する。東京驛で汽車に乘込むと一ぱい人が乗つて居つて自分の腰掛ける所がない。さうすると何と思ふ。皆が皆まで俺と一緒に大阪へ行くのぢやない。中には横濱で降りる者があるだらう。誰か

降りたら樂になつてやう。かう思うて居る。成程横濱まで行くと降りる者があるが、又乗る者もあつて矢張り窮屈なのであります。さうすると、是は國府津まで辛抱すればどうかなるだらうと思つて居る。國府津へ行つても又降りる人もあるが、居る人もあつて窮屈だ。沼津まで辛抱すればどうかなるだらう。沼津も巧く行かぬと靜岡まで行けばどうかなるだらう。是が人間です。今年は辛いな。來年はどうかなるだらう。次の驛を考へる。來年になつて辛いと、今年も辛いなあ、來年はどうかなるだらう。かう思うて、沼津、靜岡、濱松、豊橋と段々先へ行つて、來年はどうかなるだらう。來年は來年はとて暮れにけり、で、京都通りであゝ樂だと腰を掛けたが直ぐ自分は大阪で降りなければならぬ。來年は樂になるだらう。來年は樂になるだらう。漸く樂になつた場合には、最早棺桶に片足を入れて居るやうなものであると、かういふ工合に譬へるとちよいと面白い。所がもう一步進んで見るとこの譬へは面白くないのである。といふのは、汽車は降りる驛が分つて居る。人間といふものは生れるといふ驛で乗つて死の驛で下車する。所がこの驛が何處にあるか分らぬ。生れて直ぐ死ぬ人もある。東京驛で乗つて有樂町で下車する者もある。さうかと思ふと長生して下關まで行く者もある。降りて何處へ行く。死んで何處へ行くか分らぬ。又生れるといふ驛へ來た前も分らぬ。振返つて生の前を見れば茫茫として知るべからず、望んで死の後を見れば漠々として知れず、黑暗たる烏羽玉の闇夜に一點の光あり。ライフと名付くる五十年、消えて跡なくなる人生、さあどうなるか。是は譬へであります。さうすると、唯人間といふものは生れて來た先は分らぬ。死んで行く先も分らぬ。唯來年は來年はとて暮れて行くものだと言ふだけよりも面白いし分るし感銘も深い。さういふやうに無形のものはどうしても譬喩を藉りなければ話が出來ないのです。

又人生の譬へで有名なのは、人間の世の中は芝居のやうなものだと言ひます。是はショベンハウエルといふ人の書

きました處世哲學にもそれが書いてあります。それから清の康熙皇帝は天地が一大劇場なりと言つて芝居に譬へて居るのもあります。又翁草の著者なども人生を芝居に譬へて居りますが、それは芝居は幕が開くまでは誰も彼も同じ樂屋に居つて、大名になる役者もお姫さんになる役者も、家來、女中になる役者も樂屋の中に一緒に居るが、幕が開くと大名になつたり家來になつたりお姫様になつたり女中になつたりして泣いたり笑つたりして又幕が閉まる。人間の一生は丁度そんなものである。生れる前は皆どんな樂屋だか知らぬけれども同じ樂屋に居る。さうしておぎやあと生れて貧乏金持となり、泣いて笑つて五十年、死ねば又同じ樂屋に戻る。死んでから大抵同じ樂屋といふことは明かであります。焼けば灰になり埋めれば土になる。美人なるが故に香水の材料にはならぬ、金持だからといつて金鑛による譯ではない。だから人間の世の中はおぎやあとの一聲で幕が開いて、うーんの一聲で幕が閉まる。人生五十年泣いたり笑つたり悲劇をやつたりして、人生は一場の劇なりけり。是は一寸面白い。更にこの譬へをもう一步進める。人間の一生が芝居のやうなものであるならば、誰も好い役がしたいではないか。所が芝居の役は幕が開いてから決まるのちやない。幕を開けてから役を決めれば舞臺で喧嘩が起る。芝居の役が幕の開く前から決つて居るやうに、人間の運命は生れる前から決つて居るものがあるといふことを考へなければならぬ。人間は如何に自由だと叫んでも親を選ぶの自由はない。親を選んでから生れられゝば、俺は三井が宜い、岩崎だ、いや鴻池でも宜いといふことが出来るが、さういふ譯にはいかぬ。おぎやあと生れた。おやこんな親父かと實に憤慨に堪へざるものがある、金持に生れ或は貧乏に生れた。何故こんな所に生れたと言つたつて、それは本來仕方がない。現代の青年諸君に考へて貰ひたいのは此處である。吾々がどうしても憤慨しても役に立たぬことがある。何故こんな所に生れたんだらう。女などが何故こんな顔に生れたんだらう。親が怨めしいと思ふが、親だつてそんな顔に生まうとしたのではない。科學者は之を遺傳と

言ふ。成程遺傳に依つてかくの如きものを得にとしても、親がそんな顔に生まうとして生んだのではない。吾々の世の中には考へても役に立たぬことがある。だから是は諦めるより仕様がない。だが人間はそんなら諦めてさへ居れば宜いか。諦めてばかり居つては又人間は役に立たぬ。學校の先生が生徒に向つて、貴様何故そんなに出来ぬか。是はもう生れる前からの性質でありますといふのぢや困る。そこで、この譬へは更に考ふべきことがある。成程芝居の役は幕の聞く前から決つて居るけれども、好い役が當つても仕損つて笑はれる役者もあり、悪い役が當つても褒められる役者もある。金持に生れたが爲に墮落してしまふ者もあれば、貧乏に生れたが爲に奮發激勵して成功する人もある。役は幕の聞く前から決つても、之を成功するか仕損ふかはその人の腕にある。運は天にありと雖も、腕にあり青年諸君よと言ふ、さういふ工合な譬へで話しますと色々分つて行くのであります。

この譬へは非常に便利な譬へでありまして、更に色々な譬へに用ひられる。現代の社會生活は連帶責任である。丁度芝居がさうである。芝居はどんな上手な人でも一人では出來ないである。殴る役者もあれば殴られる役者もある。或は囃子方もあれば道具方もある。様々なものが寄つて一幕の芝居が出来るのである。如何に上手だからといつても一人では芝居は出來ぬ。殴る役者が上手でも、殴られる役者がにこゝ笑つて居つては何にもならぬ。それが吾々の社會生活であつて、吾々の社會生活は皆と一緒に好くなつて行かなければならぬ。一人の缺損は社會の缺損である。人の天才があれば社會の利益になるのであるといふことこの例で話して行けば分るやうなものである。かういふ材料を考へる。私共社會連帶の話をするのにかういふ譬をやります。同じ金を此處に有つて居るとする。私が金を取られると諸君は何といふ。加藤が生意氣に金を有つて居るから取られたんだ、いや痛快だとか氣の毒だなど仰しやるだらうが、それは私だけが金を取られたのではない。私が金を取られると諸君も一緒に取られるのであります。さう言

ふと變な顔をします。何も加藤が取られたからといつて吾々も取られることはない。そんな馬鹿なことがあるかと言ふが、さうではない。私が金を取られると警察へ訴へる、警察が費用を使つて犯人を捕縛する。費用を使つて裁判所へ廻す、裁判所が費用を使って取調べる。費用を使つて刑務所へ入れる。刑務所が費用を使つて食はせて居る。刑務所の費用、裁判所の費用、警察の費用は泥棒が拂ふのではない。皆税金となつて諸君の頭に行くのである。さう言へば直ぐ分る。それは一寸話が變ですが、さういふ例は非常に能く分る。かういふことは詰り譬喩の力である。譬喩は分らずといふ點に於て非常な力を有つて居るのです。即ち抽象的なことよりも具體的な方が分るのでありますから、抽象的なことを具體的な譬へで話すことが大切であります。然らば如何なることに興味を有つかと考へる。どういふことに興味を有つかと言ふと陳腐なことより斬新なことであります。古いことよりも新しいことに興味を有つ、是は殊に青年の心理であります。

何でもないことありますけれども、例へば「光陰は矢の如し」といふのは餘り古い。古いと少しも興味を有たぬ、「光陰は矢の如し」といふのは興味を有たぬが、「時は生命なり」と言ふ方が面白い。「光陰は矢の如し」といふのを明治時代には「時は金なり」といふのが一番流行つた。所がそれはもう今は古くなつてしまつた。だからもう一步進んで「時は生命なり」使つた金は返せるが、この時一度過ぎて何時の時にかこの時間が取返されるか。夢しや思へば日々の別れかな、昨日の今日に又も遇はねば。「時は生命なり」と言ふと「光陰は矢の如し」より面白い。是は陳腐より斬新なことに興味を有つ。それから平凡よりも奇抜が興味を呼ぶ。平凡なことでは、どうも昔と今では世の中が變つて、昔は大名と町人、百姓とは非常に身分が違つて居つたが、今は四民平等になつて皆一緒に居れる世の中であるといふ是だけの話をする。所が之を面白く話すには矢張り譬喩を有つて来る。どういふ譬へを有つて来るかといふと、昔は

大名の隣に百姓、町人が座るといふことは決も出来ない。うつかりそんなことをやれば首を斬られるのであるが、今なら出来る。今なら大名といふものはないが、華族の隣へでも諸君が座らうと思へば直ぐ座れる。やつて見給へ。青年諸君が奮發して多額納稅議員になつて、やあ徳川公などとやられる。それは金が掛かるが、今でもやれる。今でも華族の隣へ座る法がある。どうしたら宜いか。何でもない。一等の汽車に乗れば宜い。一等の汽車に乗れば隣に徳川公が乗つて居つてもちつとも差支ない。「あなたどちらまで」「東京まで」「一寸煙草の火を拜借」昔やつたら首がなくなります。汽車の切符を賣るのに何も身分關係で賣るのではない。お前は華族だから一等、さうでないから三等といふのではない。馬鹿でも人間萬事金の世の中である。さういふやうに一寸奇抜にやることが必要である。かうすると興味がある。昔は大名の隣へ座れなかつたが、今では四民平等で座ることが出来るのでありますと言つただけでは面白味が出ない。それをかういふ例を以てやると興味があるのであります。

それからもう一つは平板よりも含蓄的である。もう一つ言葉を換へて言ふと、説明的よりも文藝的である。説明的に話をするよりも文藝的に話をする方が興味があります。日本の文化の歴史は幾變轉して現代に至つて居ります。その間には奈良朝時代、平安朝の時代、或は鎌倉時代、足利時代、徳川時代、而して明治に入り昭和に至つて居ります。是だけの話をするのに歴史的に説明致しましたのでは平板であつて含蓄がない。趣味がない。分るといふ點は別として興味が薄い。そこで興味あらしめるのには、概念的に扱むといふことがどうも青年の一つの傾向でありますから抽象的に扱む。そこで私はかう言ふのであります。日本の文化歴史を一遍に覚える法がある。それは何であるか。春夏秋冬である。日本文化の春といふのは何時頃であるか。日本文化の曙の光は神武天皇の建國に始つたけれども、神武天皇の時代は春淺く花が漸く綻びるの候である。眞に日本の文化が絢爛の花を開いたのは奈良朝、平安朝の時代

である。初めて東洋文化を我が日本に取入れて之を日本化せんとした時代が奈良朝、平安朝時代である。「青丹よし奈良の都は咲く花に匂ふが如く今盛りなり」と言はれたる奈良朝、「大宮人は櫻翳して」と言はれたる平安朝、げに日本文化の春である。之を繪畫に見よ。之を文藝に見よ。之を彫刻を見よ。如何にも華かで春らしい。源賴朝が武斷政治を以て國內を統一した時代は炎帝赫として威を弄する夏のやうなものである。如何にも力強い。南北朝以後世は効貪の亂れに亂れ、

汝や知る都は野邊の夕ひばかり

上のを見ても落つる涙は

と讀まれた應仁の亂以後の日本の國の有様は寂寥として吹渡る秋の景色のやうなものである、如何にも淋しい、そこへ夜明の如く來つたものは西洋の文化である、西洋の文化一度來りて其の結果徳川氏は鎖國制度を布き、日本の國の戸を閉して三百年泰平の夢を食ぱりし時代は日本文明の冬の時代である。……これで春夏秋冬とやる、併し白體々たる雪の下にも春の兆しは切々として燃え出で、閉したる戸の隙間からでも春の風は吹く、三百年間泰平の夢を食はれる間に世界の文化は駆々として進み、國民の自覺は切々として燃出るが如くになり、遂に一陽來福して明治の春となつたのである。……かういふ具合にやる。さうすると面白がつて覚えてしまふ。これは本當にやればもつと面白いですが……(拍手)中々恥かしくて巧く出來ない。(笑聲拍手)

さういふ具合にすると概念的に扱む。同じ説明を駆々としてやるよりも其方が非常に面白いのでありますから、何でも青年を指導するには含蓄を與へることを放り込む、さうして向ふに考へさせる餘裕を與へる時に興味を感じるのであります。

## (二) 寓 喻

今言ふたのは明喻であります、今度は黙つて喻へるのがあります。これを寓喻と申します。修辭學といふ専門の學問に依りますと喻へを澤山に擧げてあります。この寓喻といふのは、喻へであるといふことを言はないで、而して喻へたることを理解せしめて行くのであります。だから、これは講演者が創作しても宜しうございますし、又古い人の作つた言葉を其の儘に使つても宜いのであります。昔話を聞いて見まして、人間といふものは實に身勝手なものだといふやうなことを言ふ、さういふ昔話を持つて來るのは寓意であります。

或所に權助とおさんどんとあつた。所が權助が不遠慮な奴で且那様の茶碗で水をガブ／＼飲んで居る、そこでおさんどんが注意して、權助どん、それは且那様のじやないかと言つたら、且那様だつて乞食じやあるまい……おさんどんが注意したのは且那様のだから勿論ないからといふ意味です、所が權助の方はそれを反対にとつて、且那様だつた乞食やないじやないか、かういふのは寓喻と申します。考へて見ると味がある。これをもつと他に使つて見ますと、これは私よく青年に言ふのですが、世の中に成功した人と成功しない人の言方が違ふ、成功した人の話は色々の雑誌等にも「吾は何が故に成功せしや」といふやうなことが出て居る。これを讀んで見ると、その成功した人は皆俺の腕で成功した、腕一本脛一本で今日の成功をしたものである。所が失敗した人に限つて、自分は腕で失敗したと言つた人は一人もない。お前は何故失敗したか、俺は運が悪かつた……成功した人は腕だと言ふに失敗した人は運だと言ふから、そこでそれを擧げて來る。お前が今日の成功したのは腕一本脗一本で成功したと言ふが、それにしてもこの何百萬圓といふ財産を僅ひ間にどうして持へた、腕だ、腕は分つて居るが何時やつた、これは戦争の際に巧くやつた、その戦争はお前が始めたか、それは俺じやない國が戦争をやつた、國が戦争をやつた結果お前が儲けたんなら

ばお前の腕じやなし、國に儲けさして貰つたんじやないか、さう言へばさうだがそこが腕だ。……所が失敗した奴に、お前は運が悪いと言つてどうした。運が悪かつたのか、あゝ運が悪かつた、實際あの時にあゝやればよかつたのをやらなかつたから、それは誰がやらなかつた、俺がやらなかつた。それじや運が悪いのじやない。お前が悪いのだ、さう言へばさうだがそこが運だ、これが失敗した人間の言方であります。といふやうなことは誰もそんなことを言ふた人があるのではないが、そいつを一つ挿へて喻へて言ふのが寓喩であります。

### (三) 引 喻

それから矢張り條件は同じものであります、そこに更にもう一つあります。それは曖昧なことより確實なことに興味を有つといふことであります。だから一つの話をしますにも、これはあつたことか無いことか分りませぬけれどもといふ話はどうもいかぬ。これは何といふ歴史の本に書いてある、それは延元元年五月二十五日補正成が……斯う確實に話した方が興味がある。どうもしつかりは分らぬことだけれどもいふのではどうも興味を有たない。であるから確實性を與へる材料としましては歴史であります。或は自分の眞偽で、私はこれは實際私が見たことじやない、某に聞いた話ですから本當かどうか知りませぬけれども、といふのはどうも感銘が薄い。だからそれは何といふ本にあるといふことを言ふ。それには、更にその確實性を示しますのには、それが事實であるならばその統計、これは何尺何寸といふ數、統計といふものは必ず數字が纏はるのでありますから、その統計といふものが、非常に確實性を與へる。例へば日本の人口は段々殖えて來ます。非常に殖える、益々殖える、何遍益々殖える、段々殖えるとやつてそれでは感銘を與へない、けれども日本人には奈良朝の初めには八百萬であつた、平安朝には八百五十萬、それから後は鎌倉時代を経まして徳川八代將軍の時には日本の人口は二千五百萬、明治五年の調べでは三千三百萬、それから二

十年経つて明治二十五年の調査では四千一百萬、三十五年には四千六百萬、大正元年に五千三百萬、昭和元年には六千二百萬、而してそれに朝鮮の二千萬を入れ臺灣南洋の委任統治、樺太、關東州を入れて約九千萬、正に一億に垂々とする、吾等民族の繁殖力……斯ういふ具合に數を擧げた方がよく分る、段々に殖えた、すつと殖えた、といふのじや駄目です。（笑聲）確實性を缺いて居る。だから確實性に、統計といふものは非常に力があるものであります。よく勤儉の講演などをする人が、日本人が一日にマツチを三本宛節儉すると驚くべし何本になる、一日三本宛一軒の家で仕末すると全國千二百萬であるから三千六百萬本、これを九十本宛箱に入れると四十萬箱出来ると……こゝで、こんなことを言ふて居ると値打がないから廢しますが、さういふ具合に言ふて數字を擧げる位のことは心得て居らなければならぬ。この統計を擧げる折でも成る可くなればこれを喻へるといふことが一番良い。詰り金のことならば、この一四札なら一四札を何枚積むと富士山のやうになる、東京では朝味噌汁をのむ、その味噌汁は擂粉木で擂る、その擂粉木が一軒の家で假に一分宛減るとすると東京の二百萬の世帯でどの位の材木を毎日東京人は食つて居るのか、……（笑聲）といふやうな話は非常に面白いのであります。だからさういふ喰を一つ借りて、この統計といふものを明かさずに聽かしめるといふことは非常に難かしい。これは餘程のコツが要るのであります。或は大きいのと小さいのと比較したり、或は小を積んで大とするやうに、兎に角統計が確實でなければならぬ。

その次には事實であります。この事實といふことに就きましては考ふ可きことがあります。この事實の話をなさる場合に、よく此の頃やるのであります。が、事實の認識が不足である場合、否認識不足といふのは自分の至らぬのであります。が、更に故意に事實を隠蔽する場合がある。日本人の良い所だけ言はうと思つて悪い所はすつかり隠し日本人は斯ういふ長所がある、實に良い國民である。所が反対する人が短所ばかり擧げて、日本人は斯ういふ所がい

かぬ、……これは皆間違ひでありますから、事實としてこれを述べて行つて初めて價値がある。事實の曲歪と隠蔽は良くないのであります。事實を曲げること、即ち自分に都合の好いやうに事實を曲げて、世の中といふものは良いことばかり言へば良く見える、又悪いことばかり言へば悪く見える、或人の喩に斯ういふのがあります。人間の世の中といふものは丁度栗の實を食ふやうなものだ、栗の實を食ふのに二つの食方がある。十なら十並べて一番美味いのから食ふ、九ツの中の一番美味しいの、八ツの中の一番美味しいのと皆一番美味しいのから食ふ。今度は又逆に十の中の一番不味いの、九ツの中の一一番不味いのから食ふ。これは美味しいといふても不味いといふても與へられた栗はその儘ださういふ栗そのものに事實だ。けれども吾々は價値判断がそこに色々な差を生じますから、事實を以て確實性を證すれば事實は事實の儘といふことが一番必要である、事實を隠蔽するといふことはいけない。といふことは、青年といふものは非常に輕舉にものを信する性質を有つて居ります。輕舉にものを信すると共に、更にそれが嘘だといふことが分ると非常に反抗する。青年の感情は極端から極端へと行きます。感激性が酷い代りに冷めることも酷いのであります。故に事實を隠蔽して話し、それに缺陷があるといふことを發見すれば直ぐに反対せられるのであります。でありますから事實と事實として正しく言ふといふことが必要であります。

それから更にその確實性を確保します爲に青年の仰望して居る古聖先賢の格言を擧げる。格言も話の材料として自分の說を權威あらしめる。これは私が言ふのじない、ソクラテスも言ふ、孔子も言ふ、カントが言ふた。かういふ具合に青年の皆が知つて居る人の話を引いて来る。若し知らない人の言葉であるならば……青年の大部分が其の人を知らないと思つたならば、その人のことを一應説明するのであります。例へばアメリカにピーチャーといふ宣教師があつた。これは長いこと宣教師をやつてアメリカの教會では有名な人であります。この位説明します。その人に或青年

がどうか樂をして行く方法はあるまいか、かういふて問ふたらビーチャーが答へて言ふに、汝は政治家たる能はず、汝は實業家たる能はず、職工たる能はず、學者たる能はず、新聞記者たる能はず、段々擧げて來て、「汝の爲すことは唯一つ、そは墳墓に於て眠ることこれなり」と言ふて樂をしたいと言つたものを戒めたといふ話がある、といふやうな格言を言ふ場合向ふが知らぬ人だと思つたら先づこれを説明して置く、そいつを時々西洋の人の名前を引張つて来れば青年は感心すると思つて、雑誌等に書いてあるのは時々誤植があるので其儘引用して、先生、それは何所の人ですか、西洋の人だよ、何時頃の人で、サア、マア確に西洋人だ(笑聲)よくあるです。先生、確なものに書いてありますか、キングに書いてありました(笑聲)それではどうも値打がない。矢張りさういふことを言ふ所は一應調べて、これはどういふ人であるか、又書物は時々誤植がありますから、スベンサーがスベンサーであつたり、カントがガントとなつて居りますから、さういふことを一應調べて、手近い所では西洋人名辭書でもお調べになつて、其の人の傳記位は見て置くことが必要かと思ひます。斯ういふ風に格言を引きましたら統計、事實を引くのを引喻と申します。

其の外にもう一つ必要なのは文藝上の作品を引いて來ることであります。これは色々な話も宜しいが、非常に必要なのは、含蓄のある意味を僕の文句に現はしたもののが文藝上の作品であります。殊に日本で言へば和歌、俳句といふやうなもの、或は發句のやうなもの、それは言葉が短くて意味が深いのであります。暑い／＼と言ふたからとて暑さが止むといふものではない、暑さが止まないとは知り乍らも言ふ、

言ふまいと、思へど今日の暑さかな

暑いと思へば扇がれて居つても暑い、

大名とあをがれ乍ら暑さかな

寒い／＼と炬燵の中へ這入つても

炬燵には矢張り炬燵の寒さかな

かういふ風に俳句を言ひます。俳句は十七字になつて居りますから、これを半分言つたのでは役に立ちませぬ。去年も申しましたが、よく歌なんかを半分言ふて後を忘れることがある。さういふことのないやうに原稿を持つて居れば間違ませぬが、自分が知つて居る積りで言ひ出して中途から後が出ない。歌といふやつはどうも困る。だから御製なんかを引用する場合にはちゃんと原稿を持つて居れば宜いが、さうでなくて、自分が覚えて居る積りで御製を引用する場合は決して斯ういふ御製がありますといふことを先に言ふものじやない。若し忘れた場合は其の意味をいへばよい。意味迄忘れる人はないからかうやれば大變宜い。そいつをどうしても三十一字にしようと思ふから御製を違へていつたりすることになる、でありますから、さういふ御製はきつと原稿を持つて行くといふことが一番良い。自分が餘程覚えて居る積りでも人間は間違へますから……若し原稿を持たずに言はうといふ場合は後で御製だと言ふやうに心懸けて居ることが一番良いと思ひます。

さういふ具合に和歌といふもの、若くは俳句といふものは非常に興味を増す。興味を増すばかりでなく又よく分らすことも出来る。だがその引用せらるべき俳句、和歌といふものは、文藝的に値打のあるものでなければならぬ。併し餘り文藝的に値打のない

人は如何に腹立てつゝ怒るとも

吾は静かに辛棒をせよ

かういふのは駄目だ、といふて難解な和歌もいけない、解釋しなければ分らぬといふやうな和歌は駄目であります。

前に人間は生といふ驛から死の驛に降りると申しましたが、この人生に就て面白い例があります。まあ人間は普通は年寄が先に死んで若いものが後に残るのが常例のやうであります。で、これは昔の格言の引用と和歌引用の一組の例を擧げますが、何方も御承知の日本の和歌の名人と言はれた藤原定家郷であります。小倉百人一首を撰ばれた方で、この人の父は是れまた御承知の藤原俊成郷であります。このお父さんが息子の定家郷の所へ和歌を遣られた。

定めなき世にも若きは頼みあり

ともかくも老の身の身を憂き

これは人の世は定めなしとは言ひ乍ら、若いものはまだこれから先があるが、兎に角も老人は辛いといふ意味であります。さうすると息子の定家郷、

とにかく老は多くの年を経つ

定めなき世に若き身を憂き

丁度逆であります。兎に角老人は是迄年を取つたが、定めなき世に若い者はそこ逆行けるか行けないか分らぬ、かういふやうな和歌で、説明するところに興味がある、兎に角人間の世の中といふものは假の世の中だから、夢の世の中だからといふので

人の世は假りの世なれば借るもよし

夢の世なれば寝るも亦よし

かういふ樂天的の人がある、所が又

人の世は假の世なれど借にくし

夢の世なれどさうは寝られず

かうなると餘程興味があり、又分り易いのであります。かういふ和歌を引いたり俳句を引いたり格言を引くのを皆總稱して引喻と申します。

### 三 同じ材料でどうして上手下手の

#### 區別があるか——組立の問題

先づ話の材料として主なるものは以上の譬喻であります。さうして明喻、引喻、この三つが譬喻の中でも最も值打のあるものであります。これで先づ資料は大體お話しましたが、話の材料は斯ういふ方針で集めて、然らば同じ材料を以て居てどうして上手下手の區別があるか、これは考へる可き問題であります。それは前にも申しましたが組立の問題であります。組立方が違ふ。こゝでちよつと注意しますが材料等を……方式を御研究になるには修辭學といふ専門の學問があります。これは尙ほ後の總てに關係しますが、茲に組立るといふ上に於てその基礎學科となるものは論理學であります。この論理的の組立と修辭的の組立から二つに分けて考へます。

#### (一) 論理的の組立

論理的の組立と申しますのは、所謂論理學は三段論法であります。併し三段論法に限りませぬ、所謂直接推論の方式もありますが、演繹と歸納とあります。演繹法は御承知の通り大前提から小前提を経て斷案を出すのであります。即ち一つの大趣意を決めて、大趣意からこれを應用して、これを引出して結論を生ずるのであります。盛んだつた國

は皆衰へてしまふ。ローマもさうである。バビロンもさうである。今やアメリカは非常に盛んである、故にアメリカも遂に末路に向つて居るのではないかといふやうに、盛んなるものは衰へるといふ原則を出して、それから應用して行く。所が歸納法はそれを逆に行きます。「専て盛んなりしバビロン、アッシリヤは今何處にある、歐亞の大陸に朝を唱へたローマは今何處にかかる、盛んなるものは衰へる」さうして次に取扱を出して來るのであります。歸納法は事實から結論に至る。それから演繹法は原理から事實へと應用して行きます。……こんなことは演繹法と歸納法の講釋になるから略しますが、さういふ具合に論理的に組立のがあります。がこれも長くなりますから省略致します。

文章にしても演説にしても大體の組立は三つであります。賴山陽が森田節齊に與へた文章は色々な組立があるけれども、要するに三つである。この賴山陽と私とは同意見であります。……といふ非常に偉さうであります。矢張り演説に於ても三つであります。今は賴山陽先生の言葉を引きます。

#### 綱領 一段格、鶴膝法、收束法

かういふものをつけて居ります。綱領一段格と申しますのは……文章を三段に分けます。前、中、後、一番先に大趣意を言ふのであります。「私は現内閣に反対せんとするものであります」結論を先に言ふといふのが、これが綱領一段格。それから初めをすつと言つた後に、眞中に趣意を入れる、すつと理由を述べて、「斯ういふ理由で私は現内閣に反対せんとするものであります」と眞中へ入れ、又更に説明する、丁度鶴の膝のやうですから鶴膝法といふ。それから收束法といふのはすつと言つて行つて一番終ひに、「この理由に於て私は反対するものであります」といふ具合に言ふ。大趣意が一番前にあるのが綱領一段格、眞中に置くのが鶴膝法、終ひに置くのが收束法、これは大體の講演なり演説の組立の一番初めであります。そこで先づ聽衆の具合を見まして、大趣意は初めに言ふた方が宜い、或は眞中が宜い

とか、終ひが宜いとか決める。例へば政談演説等に於て政黨のことを言ふ時に、これは政府黨か反対黨かどつちか分らぬと聽衆は疑惑を有つて居る、その時に、この聽衆は大部分が反対しさうであるといふなれば、自分が反対であつたならば、それを前に言ふた方が聽衆が喜んで聞く。又その逆である折にはすつとやつて、これ私が反対する所以である、と一番終ひにやるといふ風に聽衆の具合を考へてやる、先づこの地方はどういふ聽衆であるかといふことを考へてから越意の置場所を決めるのであります。まあ論理的の組立は論理學の方の御研究をして下さることを願ひます。

論理的組立は今申しました通り論理學を御参考下さることを願つて居ります。又修辭的の組立は修辭學を御参考あらんことを願つて置けば私は何も言ふことは無いのであります。けれどもそこのヒントだけを申上げて置きます。

## (二) 修辭的の組立

論理の方は明確にはつきり示すが爲に、意思を正確に傳達するのが論理でありますし、面白く聽かして感銘を深かしめるといふことは修辭的の組立に依るのであります。この一切の美といふものゝ約束であります。それには何にも統一と變化と調和といふ三つが要ります。これは總て音樂に於ても統一と唯統一だけでありますと眠氣がさします。そこで變化が要ります。併し變化ばかりでそれが不統一では困るので、そこで調和、この三つが要ります。よく話などに統一のない話があります、彼方をやつたり此方をやつたり、此方をやつたり彼方をやつたりして支離滅裂、此頃流行ります漫談でさへ統一があるのであります。それで話に統一がなくて思付でありますといけませぬから、初めから終ひ迄この統一が必要であります。けれども唯最初も終りも同じに行きますと興味が無くなる、そこで變化といふものが要ります。又變化ばかり考へて居りますとそこに統一を缺きますから今度は調和といふことが必要であります。詰り調和が一番必要であります、變化と統一……そこで音樂等は御承知でもありませうが、昔から支那でも

序、破、急の三つがあります。これが音楽の三つの備はるべき要件であります。序といふのは静かに起つて行きます。急といふのは非常に急がしくなつて行く、その序と急とを調和するのが破であります。序と静かに破となだらかに行つて終ひに急になつて音楽は生れて行く、この順序が序から急になつて後で破になるのがあります。兎に角、序、破、急とこの三つがないと音楽として興味がない。で文藝の作品に就て考へて、一番手近く申しますれば詩であります。漢詩は御承知の通り起、承、轉、結の四ツから成つて居ります。起は起り、この起で起つたのを承で承け、そこで轉じて變化して終ひに結ぶといふのが詩の組立の方法であります。何時も詩の話をします時に引かれますのは藤井竹外の二十八字詩で、

桃花水暖下輕舟、背指孤鴻欲沒頭

春先の淀川を舟ですつと下つて行つて、後を見ると其所に鴻が水に没して居る、これが前句

雪白比良山一角、春風尙未到江州

桃下水暖かに淀川を下つて居るが向ふを見ると比良の山は未だ白い、して見るとこの春は未だ江州には行つて居らぬといふのが竹外の二十八字詩の中の起承轉結の最も明かなものとせられて居ります。又この起承轉結を或詩人が、

京の三條の絲屋の娘、姉は十八妹は十五

諸國大名は刀で殺す、絲屋娘は目で殺す。

初めの「京の三條の絲屋の娘」これが起で、それを承けて「姉は十八妹は十五」バツと轉じて「諸國大名は刀で殺す」これがどう結ばれるかと思ふと「絲屋娘は目で殺す」かういふのが起承轉結であります。だから修辭的に組立する場合に統一と變化と調和、この三つの原則がありまして、音楽に於ても詩に於ても、これを明かに見ることが出来る。だから一

つの講演なり演説なり、殊に雄辯といふものは丁度馬に乗るやうなものであります。馬に乗るのには馬を何時も引締めて居つては巧く乗れるものでない、緩めたり引締めたり、緩めたり引締めたり、調子をギュツと引締めてバツと緩める、終ひ迄聽衆を緊張さして居つては、二時間も三時間もすれば緊張がゆるんでしまふ。そこで緩めたり締めたりする。これを緩急自在にやらなければいかぬ。聽衆を笑はしてばかり居ると緩めてしまふ、だからギュツと引締めて緩めるこれが矢張り統一、變化、調和の必要があります。これは尾崎行雄さんだと思ひますが、演説は馬に乗るやうなものだ、自分が馬に乗られたから言はれたのでせうか、又雄辯家であるから言はれたと思ひます……聽衆をギュツと引締めたり縮めたり、さうして聽衆と辯者と一つになつて居れば鞍上人なく鞍下馬なく……さういふ具合に行かなければならぬが、唯これは原則だけを申上げたのであります。

これだけでは未だ明かでありますから、そこで二三の例を挙げますと、これは列叙より前に漸層法、列叙も要りますが、ものを數へ立てゝ言ふ枚舉法であります。私はこれ／＼これを言はふと思ひます。第一、第二、第三と數へる、私はこの六點に就てお話をしようと思ひます。第一が三十分掛かると假定します。さうすると聽衆は、これから第三だ。一つが三十分とすると後二時間かかる、かういふ氣になる、そこで第一第二位迄は辛棒するが、第三、第四となると、あゝまだいくつあるといふことになるから、さういふ具合に聽衆を飽かさないやうに、引締める爲には、今の漸層法で、これには言はねばならぬことがあります。第一色々あるといふと幾つあるか分らぬ、第一第二位で終るかと思ふと第三とやる、これで終ひかと思ふと、以上三項の理由を以てこの問題は明かであります。更に必要な第四の理由があります。これで宜いかと思ふと諸君、これはどうしても諸君に聞いて頂かなければならぬ重大的な理由があります。以上の外に更に最も必要な第六の理由は……(笑聲)これを六つ變へてある。かういふと、

お前先刻これ／＼六つある、六項の觀點でこれから述べるといふのであるから、どうも枚舉法ぢやないかといふが、これはちゃんと時間が決まつて居る、私は言はうと思つたら諸君はその時間迄聽いて居らなければならぬ義務がある。そこでこんなものが幾つあつても差支ない。これには六つの理由があります。一つが三十分掛かります。これから二時間半……ちゃんと時間が決つて居りますからさう言つても差支ない、嫌でも應でも聽いて居らなければならぬ。勝手に立つて行くことは出來ないことになつて居る。これ幸ひなりと考へて私は六項の理由を申上げるのであります。が、普通の場合は言はない方が宜いのであります。

それから平叙法より設疑法であります。疑ひを聽衆に向つて問ふのであります。これはどう思ふか、必ずかうお考へだらうが、さういふ考へではいかぬ、といふので私はこの設疑法といふのをいつでも言ふ。私等がいつもさう言つて居りますのは、人間は何の爲に生きて居るか、働いて居る人を擱まへて、お前は何故働いて居るか、働かなければ食へない。食はなければ死ぬといふことは分つて居るが、食へれば死なゝいか、かう聞きますと變な顔をします。諸君は毎日々々生きて居りたい爲に食ふならば毎日々々生きる方へ近くなるのか死ぬ方へ近くなるのか、人間の出る息は墓場に行く行進曲である、一步々々死の方へ行くぢやないか、食つても死ぬ、食はなくとも死ぬ。第一人間は何の爲に生きて居るか、何の爲だから分らぬけれども生れた序に死ぬ迄生きて居る、若し唯生れた序に死ぬ迄生きるならば犬でも猫でも牛でも馬でも生れた序に死ぬ迄生きて居るぢやないか、人間の人間たる所は何所にある、これは大いに研究しなければならぬ問題である。かう言ふと聞く氣になる。人間といふものは働いても死ぬが働かなくとも死にます。詰らぬものであります。さうであります。(笑聲)これが設疑法、それからもう一つは比較法であります。これはものを

一つ述べるよりも二つ比較する。諸君、世界の人海は東西背中合せに長い年月文化文明を形造つて來たのであります。一つは地中海から太西洋の方へ向ひ、一つは印度洋から太平洋の方へ向つた。斯様に東西背中合せに長き年月文化文明を形造つて來たから西洋の文化と東洋の文化とはその特質を異にして居るのであります。西洋文化に於きましては主として生活物質の豊かならざる所から生存競争に依つて發達して來た文化であります。東洋の文化はガンヂス河の邊り、黄河、楊子江の邊りの生活物質の豊かな所で發達したのでありますから、西洋の文化は自然を征服して行くといふことに重きを置き、東洋の文化は自然は自然の儘にして自分を征服して行くといふことであります。故に東洋に於ては五常の道徳が起り、西洋には生存競争の優勝劣敗、故に西洋の思想は實用的であります、東洋の思想は趣味的であります。瀧川の水の流れを見ても東洋人は「溪聲潺湲以て我耳を洗ふ、あゝ美なる哉瀧の響よ」と言つて居る。所が西洋人は「この水の落差はどの位あるか、これは水力電氣に應用が出来る」總てが實用的である。例へば喋べるといふことに就ても西洋では自我といふものを出して行きますからこの喋べるといふことが非常に發達して居る。ギリシャ、ローマの昔からエロキューーション、オレトリー……雄辯學とか能辯術が非常に發達した。東洋に於ては喋べる代りに黙つて居ることが研究せられた。黙つて居ることの研究は印度に於ては坐禪、支那に於ては靜坐となつて黙つて自己の神來の泉を聽かんとする、西洋に於ては経験を積む。故に文化は経験的で實用的である、東洋の文化は創動的であり瞑想的である。故に西洋は自然を征服する文明であり、東洋は自然に哺まれ、自然に征服された人生である。だから東洋の文化は沈滯してしまつた、西洋の文化は實用的で進化した。東洋の文化は印度洋から太平洋の方に向ひ、西洋の文化は地中海から大西洋に向つた。所がこの廣々たる大西洋の向ふに陸があるといふことを誰も知らなかつた、それを千四百九十二年コロンブスといふものがこの茫茫たる大西洋を征服して遂にアメリカを發見した。併

し、これもアジアの一部であると思つて居て、その向ふに更に海のあることを知らなかつた。然るに西暦千五百三十年スペイン人バルボアなるものあり、アメリカ大陸を征服して更にその向ふに海のあることを見た、この海こそが吾等東洋人が日常見て居つた太平洋であります。曾て背中合せの東西両洋の文明は面と面と相合して、茲に世界文化の曉の光りは現はれたのであります」といふ具合に……(笑聲)といふ具合に二つ比較して行く、これは非常に話が面白くてよく分かる、昔と今と言ふならば、昔の人は實に正直であつた、今のは賢い。昔の人は金を借りる折に「若し期限至りて返済仕らざる節は人中にて御笑ひ下され度候」と書いた人があるといふことである。今のはどうか、「若し期限に至り返済仕らざる節は何方の裁判所に御訴有之候共返さざる算段相考可申候」片一方言つたゞけではいけない、これを較べる、對比する。人間は總ての譬喻といふものは反對聯想といふのがある。馬鹿と言へば利口だ、黒と言へば白だと思ふ。そこで二つ較べると彼方も此方も明かになる。この反對聯想を言ふとよく分かる。これは心理學の聯想、表象の聯絡、アツソシエーション、思想聯絡の現象であります。

それから話を致しますのに統一といふことを言ひましたが、それには順序といふものを能く見て行かなければならぬ。人間の思想の過程といふものは決つて居りますからそれに依つて話が繋つて行かなければならぬ。私はこの間九州の方に行きましたが、その前に東北に行き近畿地方にも行きました。近畿地方でかういふを見て、九州でかういふことを見たが東京ではそれが……といふやうな言ひ方はいかないのであります。所々飛ばないで、自分が行つたなら行つた順序で話をすると方が好い。時々こつちの話をして又あつちの方へ行くと思想の聯絡が取れなくなる。さういふやうな思想聯絡や何かを知つて、さうして修辭的に組立て行くといふことが修辭學の法則であります。もう一つは御存じでありますか、心理學の中のアツソシエーション、表象の聯絡と言ひますか、觀念の聯合と言ひます

か聯想作用の點を御考を願つて置きたいといふことを申上げて置きます。之を基礎學科と致します。

#### 四 同じ組立であるのにどうして

##### 上手下手の區別があるか——言語の問題

組立はそれ位に致しまして、同じ組立であるのにどうして上手下手の區別が出来るかと言ふとそれは言語であります。言語の話は外の講師もせられたでありますせうが、日本の言葉といふものは一つのことと言ふのに多くの言葉を有つて居るのであります。故にその最も適當なる言葉を選び出すといふこと、不適當な言葉といふものでは非常に違つて行くのであります。去年も私言ふたのであります、私と言ふ場合と拙者と言ふ場合と僕と言ふ場合と我輩と言ふ場合とある。それは矢張りその時々に於て使ふが好い。諸君と言ふ場合と皆さんと言ふ場合とあなた方と言ふ場合もある。婦人命などへ行つて諸君なんと言ふとどうも可笑しい。矢張りあなた方とか皆さんと言はなければならぬ。

青年會なんかへ行きましたは、どうも皆さん、あなた方でも可笑しい。矢張り諸君が好い場合もある。それはその時々に依つて決めなければならぬ。同じ御婦人を呼ぶのにも、例へばお嬢さんとか奥さんは年齢が違ひますから別として、お女中承りたいことがある、或は御婦人と言ふのもあります。姉さんと呼ぶのもあります。姉さんと言ふ方が適當か、お女中と呼掛けるのが適當か、御婦人が宜いかはその話の都合に依る。料理屋で酒を飲む。一寸御婦人では可笑しい、それは相手の着物や形振りに依つて姉さんと言つた方が都合が好い場合もある、或はお女中と呼んだ方が宜い場合もある。それは時と場合に依りますから、同じことを言ふのにも色々あるといふことを吾々は第一に考へて、誰

がやつても是より適當な言葉がないといふ言葉を考へるといふことが一番必要なことあります。

### (一) 現代的の言葉

言葉は所謂言の葉であります。言の葉といふのは面白いもので、葉といふものは新芽が出ると古い葉は落ちて行く。もう落ちてしまつた言の葉は死んだ言葉である。是は昔の言葉で今はない。昔は當り前に生えて居つたものが、今は落ちてしまつた。新芽が出て居るのにまた古い葉を使つて話をする。私の親父なんかは役所へ來まして、昔風に役所の同僚を同役と死ぬまでさう言つて居りました。所が今は、冗談には言ふかも知れないけれども、俺の役所の同僚連中とは言はぬ。同僚といふ言葉が出來て同役といふ言葉が落ちてしまつた。それを拾ひ上げて言ふ。是は昔の言葉である。さういふ昔の言葉を拾はないやうに、言葉は次から次に新しいものが出來て行きますから、言語を選ぶのには新しい言葉即ち現代的の言語を選ばなければならぬ。古い死んだ言葉はいかぬ。現代語を使ひませぬと青年には中々分らぬのがあります。社會の通念として使はれて居る言葉でないと、能く年寄は今の若い人の言ふことは分らぬと言ひますが、今度は年寄の言ふことを若い人が分らぬといふことが多いのであります。だからさういふことがないやうに、社會通念で使はれて居る言葉、現代語を選ぶといふことが一つであります。

### (二) 國民的の言葉

その次は國民的の言葉であります。國民的といふのは一地方にのみ行はれる言葉でない、全體的に行はれる言葉で日本國民として行はれる言葉であります。例へば東北だけで行はれたり、九州だけで行はれる言葉はいけませぬ。今や中央標準語に依つて規定せられ、學校で使ひます言葉は全國的に同じなのであります。その教育を受け居る青年でありますから成るべく地方語を避けるといふことが必要であります。國民的といふのはさういふ地方語

を避けると同時に外國語も無暗に使はないこと、今はまだ過渡時代で外國語でなければ説明出来ないことがありますから已むを得ませぬが、無暗に外國語を使って俺はこの位外國語を知つて居る、豈偉からずやといふやうなそんな態度で人を指導することが出来るものではない。一體今の青年は俺を古臭いと云ふから一寸英語を出して驚かしてやうといふやうな考で發音の間違つた英語なんかを出して得々とするに至つては、その人の愚を暴露して居る以外に何物でもないと思ふのである。そんなら外國語は皆いかぬかと言ふと、既に一般的に使はれて居る外國語は使つた方が宜いのです。之を日本語に翻譯すれば分らなくなるのもあります。ラヂオだとかパパ、ママーも外國語だからいやうぬ。尤もパパ、ママーがいかぬといふのは文部大臣の御意見でありますから本當にいかぬが、まあそれはいかぬとして置きましても、ラヂオの方は一寸困る。あれは西洋の方から來たものであります。パパ、ママーは西洋から來て出來たのではない。あれは日本の昔からお在りなさるお父さんお母さんである。それを西洋の言葉で言ふには及ばないけれども、ラヂオは何と言つたら好いかといふと放送無線電話といふのが一番適當でありますが、君今朝放送無線電話を聽いたかと云ふと話が分らぬ、ラヂオで通するのでありますから、一般的に通する外國語はその方が宜しうござります。

### (三) 普遍的であること

それで現代的、國民的であると共にもう一つ普遍的でなければならぬ。誰にも行渡つて居なければならぬ。普遍的であつたら外國語でも宜しい。普遍的ななるさる言葉といふものは何であるか。學問上の専門語、テクニカル・タームであります。醫者なら醫者だけの使ふ言葉、科學者の或る専門家の使ふ言葉である。皮下注射するといふことは醫者の専門語であります。それを普通に使つたりなんかすると可笑しいのであります。さういふのはいかぬのでなりまし

て、専門のことを使ふのには已むを得ませぬが、その専門語を使ふ場合には専門語を十分に解釋することが必要である。無暗に専門語を振廻して自分の學識を誇らうとするが如きは、眞に指導し得るものではない。殊に青年の一番嫌がるのは知つたかぶりであります。知つて居るのを知つて居ると云ふのは當り前であります、餘り能く知らないのを知つたかぶりで振廻すことは一番青年の嫌がる所であります。だから青年指導に於て知つたかぶりは禁物であるといふことを申して置きたいのであります。

#### (四) 青年は如何なる言葉を喜ぶか

然らば青年指導に於て、青年は如何なる言葉を喜ぶかと言ふと冗漫より簡潔であります。冗漫といふのは話が諄々しくて長いのであります。それよりも簡単にして明瞭なる言葉を喜ぶのであります。故に修辭學で警句と言つて短い趣味深い言葉がありますが、その警句といふものは青年に喜ばれる。前の拓務大臣永井柳太郎、その人は何回議會に出て何遍演説して居るか知らぬが、其の演説は皆忘れてしまつたが、「西にレニンあり東に原敬あり」と言つたことだけは覚えて居ります。原敬内閣でやつたあの短い言葉だけは覚えて居る。諸君はバセラック・ヘンリーがアメリカの獨立戦争の時にしたあの長い演説は皆忘れて居る。併ながら最後に言つた「自由か死か、自由を與へよ然らずんば死を與へよ。」あの言葉が非常に青年を動かして居ります。冗漫より簡潔。だから私は日本の歴史と世界の歴史を較べる折に、私はこの事を餘程考へまして短い句を挙へたのであります。世界の歴史は國家興亡の歴史なり。日本の歴史は國家興隆の歴史なり。是は極く簡単に世界歴史と日本歴史とを表明して居ります。かう言うだけでは分る青年は分りますが、分らぬ青年は分らぬ所がある。さういふ折には大衆にはかう説明します。日本は建國以來二千五百九十五年、この神武天皇建國二千五百九十五年を西洋の歴史に較べると西暦紀元前六百六十年である。西暦紀元前六百六十

年にあつた國で今ある國は何處にある。今日霸をヨーロッパに唱へて居るイギリスもフランスもドイツもロシヤも、或はアメリカも皆その時分は茫々たる草野原、唯遊牧の民あるのみである。當時霸を唱へたるバビロニヤ、アッシリア今は影も形もないものである。今日ヨーロッパで威張つて居る國も、一千年の歴史を有つて居る國はない。若し夫れ王統から言へば、イギリスは古いと言ひますが、それが尙ほ二百餘年、ドイツ聯邦が集つて帝國の出來たのは明治四年、イタリーが統一せられたのも明治四年である。是等はまだ古い方である。新しいのになると、世界大戰亂後出來て建國以來十四年。それ等はまだ古いのである。もつと新しいのは滿洲新國家建國以來二年と何箇月。かくの如くに世界の國は出來たり亡びたりして居る。獨り巍然として東海の表に立つのは我が日本のみ。故に世界の歴史は國家興亡の歴史なり。日本の歴史は國家興隆の歴史なり。是だけ説明します。説明せぬで分る所は説明しない。さうすると支那はどうだといふことを言ひますから、もう一つ附加へます。世界の歴史は民族盛衰の歴史なり。支那は或時は漢民族が支配し、或時は蒙古民族が支配し、或時は五胡十六國に分れ、或時は滿洲民族が支配したのであるから支那の民族は盛衰して居ります。ヨーロッパも時にはラテン民族を唱へ、或はチュートン民族、而してスラヴといふやうに民族に盛衰がある。世界の歴史は民族盛衰の歴史なり。日本の歴史のみ民族發展の歴史なり。かういふ短い言葉の中で説明して居る。その言葉は青年に非常に記憶され喜ばれるのであります。是も、今は説明しましたけれども、分り易くないと非常な名句でありますながら人に記憶せられぬものがあります。先の永井柳太郎の「西にレニンあり東に原敬あり」といふのは有名になつて居りますが、青島戰争の折に大義毅の演説に、青島を撃たねばならぬ、「臥床の下駄聲を許さぬ」是は名句でありますが誰も分らぬ。今日本が太平の夢をやつて居る時にドイツが青島に於て駄の聲を出すやうなものである。だからドイツを撃たねばならぬといふのであります、如何にも面白い「臥床の下駄聲を許さ

ね」誰も賛成をしない。分らぬからであります。だから短いのは宜いけれども、人に分らぬのちやいかぬ。分らせなければいけないのであります。

それから青年は乾燥よりも興趣を喜ぶのであります。乾燥な言葉よりも興趣のある言葉を喜ぶ。是は先に例を挙げましたやうに文藝上の言葉が入つて居りますと非常に青年は喜ぶのであります。乾燥の言葉よりも趣味のある言葉、それは文藝的の文句であります。

次にもう一つ、青年は直説よりは反語を喜びます。眞直に言ふより逆に言ふのであります。是は青年を喜ばす。昨年中しました反語の例は、世の中に人の来る程五月蠅はなし、とは言ふものゝお前ではなし。是は當り前に言へば世の中には人の來るのは五月蠅い。お前の來るのも五月蠅いといふのが當り前ですが、それを逆に言うて、世の中に人の來る程五月蠅はなし、とは言ふものゝお前ではなし。お前は構はぬと思ふやつは餘つ程馬鹿であります。之を反語と言ふのであります。私は國家の爲に實に身を忘れ家も忘れて居る馬鹿者であります。馬鹿者といふ意味ではないのであります。自分の利口なことを馬鹿といふ言葉で言ふ。是は反語であります。反語といふものは褒めてくさすことであります。君は偉いよ。是は餘り偉くない人に言ふのであるが、字に書いて見れば偉いよと褒めて居る。是だと怒れない。眼は東南にあつて意は西北といふことがある。やつて居ることゝ心と違ふ、さういふのが反語の説明の仕方であります。或る代議士を攻撃しました演説にかういふのがあります。彼の男は世界の大勢も知らず、國家の事情も知らず堂々議席に列するの膽力を有して居る人である。是は褒めて居るのか悪口言つたのか分らぬ。世界の大勢も知らず國內の事情も知らずして堂々議席に列し、稱して國家の選良と言ふだけの膽力のある人である。餘程大膽だと言ふ。是は攻撃するより餘程好い。實は酷い攻撃であります。さういふのが反語であります。反語の例は、シエー

クスピアの書きましたあの「シーザー」の中に、ブルタースを攻撃したマーク・アントニオの演説が一番反語の例となつて居ります。マーク・アントニオはブルタースを攻撃する時は悪口をすつとして来ては、正直な人だ、正直な人だと言ふ。あれは反語の例になつて居ります。かういふ反語は青年が好きであります。之を以て國家の選良と言へませぬと言ふより、之を以て國家の選良と言へませうかと向ふに向けると大變好い。今日の場合悠々閑々としてこの國家の前途はどうなりますか。かういふ工合に疑問的に言ひます。是も矢張り直説の言ひ方よりは青年を動かすやうであります。先づ言葉の方は大體その位にして置きます。

## 五 同じ原稿で何故上手下手があるか——音聲の問題

今度は、同じ言葉で同じ組立、同じ材料ですから同じ原稿が出来たのであります。その原稿で何故上手下手が出来るか。詰り同じ臺本を有つて居る淨瑠璃語りに上手下手が出来るやうなものである。是は聲音に依ります。同じことを言ひますのも、昔には音色といふものがありまして、是は加藤の音、誰某の音、或は音の高低、音度と申しますが、之に依つて違つて來るのであります。感情の激した場合は音が高い。沈んだ場合には音が低いのであります。陛下の御聖徳などを話しますには、是は感情を沈めて話すべきであります。故に音を低くするのであります。陛下のことを例に引いては畏多うございますけれども、歴代の御聖徳を思ふと何とも申上げられぬやうな氣がする。聖恩深き、闇の哀を重ねても思ふは民の夜寒なりけりと仰せられた陛下の御聖徳。かういふのは沈んで言ふが感じがある。同じことを言ふのに、音度を高くして言つたのでは何にもなりません。同じ原稿でありますも、感情の激した場合は高く、沈んだ宗教上の有難い敬度なことを言ふのには低くすべきであります。

それから音の幅であります。音の幅に廣いのと狭いのがあります。太鼓の音は音の幅の大きいのであります。拍子木の音は音の幅が狭い。カチッとドーンであります。大きなことを言ふ時には音の幅を廣くする。小さなことを言ふ時は音の幅を狭くする。大いなるかな氣分、渺々たる天地、誰人か我友となつて呉れる。かういふ大きいのは幅を廣くする。小なるかな我身、渺々たる天地の大、小さき我體。かういふのは、小さい所は音の幅を狭くする。それを反対に言うて御覽なさい。一寸言へない程可笑しくなる。是が音の幅であります。それから音の長い短い。是は感情の緩やかな場合は音が長くなる。感情の激した場合は音が短くなります。——今日は非常時である。國難日本である。此の國難日本に直面して諸君何故遊蕩に耽つて居る。日本をどうする。起て、起て、諸君起たんば蒼生を如何にせん。是は短く行く。之を長くやつて御覽なさい。——今日は非常時であります。國難日本であるのであります。此の國難日本に直面して遊蕩に耽つて居つてどうしてこの日本の國が立つて行けますか。起て——諸君……と言ふのはどうもいかぬでせう。矢張り是は短く言ふ所に値打がある。そんなら今度感情の緩い時、緩い例は一寸取りにくいやが、文學的の話を致しますと、春の夕暮に庭へ出て見て居りますと、遠寺の鐘の音につれて櫻の花がひらくと散つて行きます。あゝ春も往くか。青春夢の如く空中の春光今何處にある。かういふのは長い方が宜い。之を短く言ふと餘程妙になる。所が原稿に書いてあるのは同じことであります。それが音の幅とか音の長さとか或は音の高低に依つて變つて行くのであります。この音聲といふものは矢張り修辭學の方でも言ひますが、音韻の學問として別に研究せらるべきものであります。

更にもう一つ實際講演の上に於て注意すべきものは模聲といふことであります。之を利用するとして話が大分變つて参ります。原稿は同じであつても、この模聲の使ひ方に依つて變つて来る。例へば夏の日に外へ出ましたら俄

に黒雲が起つて雨が降つて稻光が光つて雷が鳴つた。是だけのことを言ふのに、俄に雨が降つて稻光がして雷が鳴つて實に驚いた。是でも宜い。宜いけれどもその話を活かすには、俄に雨がザーッと降つた、稻光がピカリ、雷がゴロゴロと、どうすることも出來なかつた。ザーッといふのやゴロ〜、ピカリといふのは何であるか。雨の音、雷の音稻光の形を模したものである。是が模聲である。この模聲は話を活かして行くのであります。私は人の意見とピタリと合ふ。ピタリといふ音が意見にしますか。如何にも音がしさうなやうに模聲する。この模聲の一例を擧げて見ませう。文章の形容詞は皆模聲から出て居るのであります。伐木丁々といふのも溪聲潺湲といふのも春水滿々たりといふのも皆聲に模したのが文語となつて居ります。それを更に具體的に模したのが演説の模聲であります。

例を申しますと、水戸黄門光圀卿の時代に、支那から参つた東臯心越禪師といふ有名な和尚さんがあつた。是は明の遺臣であります。水戸に祇園寺を建てゝ、關羽の末孫であるといふので非常に尊敬したのであります。或時光圀がこの東臯心越禪師がどの位膽力があるかといふことを試すので、もう西山に隠居しましてから呼びました。さうして酒を御馳走したのであります。今東臯心越禪師が盃を受けて、その盃に酒をなみくと注ぐ。その盃を取つて飲まんとする所に、豫て用意して置きました大砲を次の間に仕掛けて置いて、禪師が之を飲まんとする一刹那にゾドンとやつた。大抵の者ならビクリと引継返る。所が禪師はこの盃の酒は少しも動かすにグツと「有難く頂戴仕つた」と言つた「やあ實は禪師失禮した」それは失禮した、それは失禮でせう。人が酒を飲むのに大砲打つんですから……。さうすると「大砲は武門の習、別に御斟酌には及びませぬ」武家が大砲打つのは當り前だ。是は別に御斟酌は及びませぬ。「返盃仕ります」そこで盃を光圀に返した。光圀はこの盃を取つて、今度は大砲の心配はないものですから、禪師が酌をするといふので一ぱい注いで、その盃を有つて水戸光圀が今飲まうとする時に、禪宗でやりますクワツと言つたの

で引継返した。「坊喝は禪家の習、別に斟酌は仕りませぬ」といふ話です。この話が活きるのは何處でありますか。なみくと注いだといふのが既に形容詞、グッと飲むのも、ゾドンといふのも模聲であります。この模聲を總て抜いて話ををして御覽なさい。酒を注いで飲みました。鐵砲打ちました。驚いて落しました。模聲を除くと話は活きなくな。そこで茲に考ふべきことは、模聲といふものは主に聲を真似るのであります。人の聲を真似るのを聲色、假聲と言ひますが、是は果して講演壇上で用ゆべきものかどうか。お婆さんの話をするにはお婆さんの聲を出さねばならぬか。是が所謂趣味講演と吾々の講演と違ふ所であります。

趣味講演とか講談とか落語とか稱するものは是は藝術であります。藝術は客觀的、沒主觀であります。例へば某といふ講談師が大石良雄の話をする所に、大石良雄の所へ講演師がちよいしく顔を出したらいかぬ。全く大石良雄になり切つて話をしなければならぬ。それが藝術的講談である。客觀描寫であります。自分の主觀を没して客觀になつてしまふ。所が吾々が講演の際一挿話として話を致しますのは、吾々の主義を援け思想を補ふ爲に用ひられたるものでありまして主觀中の客觀であります。それでありますから加藤を忘れて大石を出すことは要らぬ。加藤の思想中の大石でありますから、講演壇上でお使ひになる場合には聲色には及ばぬ。寧ろ權威を害するのであります。唯その人の使ふべき言葉を言ふことであります。例へば昔の士の話をするのに、士同志が寄つて君は何處へ、一體僕は、と話をしたのではないか。貴殿はいづ方へ……身共は是より……といふやうに、さういふ言葉はその人に相應するやうに言はねばならぬが、進んでその人の聲色まで使ふには及ばない。此處が講談や落語と青年指導に使ふ話のもとの違つて来る所であります。客觀描寫になりまして自己の主觀を没してしまふといふことになれば、それは一つの趣味講演となり、或は藝術となつてしまふのであります。吾々が青年指導をする場合にかういふ例を引きますのは、

青年を自己の思想に導く仕方として引くのであるから、自己の主觀中の人物であるといふことを常に考へなければならぬのであります。かういふ場合にして聲といふことに餘程注意をして行かなければならぬ。

## 六 實際演説上の注意

今度は同じ聲であつて同じ演説であつて、即ち同じ人がやるのに甲の場合と乙の場合とに依り、上手下手が出来るのは何故か。それはその人の氣分にも依ります。これが氣分のことはその人自身のことでから、今どうと言ふ譯には行きませぬが、殊に注意すべきものは會場の設備であります。會場をして成べくその人の思想を聽衆に傳達せしめるやうに設備する。殊に青年は感情が極端から極端に動く性を有つて居ります。故に暗示を受け易いものであります。煽動に乗り易いものであります。煽動と言ふと悪いけれども、兎に角暗示を受易いのですから、暗示を受け好いやうに會場の設備をするといふことは、是はその演説を效果的ならしめる一つの方法であります。それは外でもありますねが、聽衆と演者との距離を短くすること、即ち聽衆と演者とを密接ならしむること、それから聽衆と聽衆とを密接ならしむることであります。例へばこつちに五六人、眞中に二三人、向ふに五六人とばらへと居つたのではどうしても暗示を與へることは出来ませぬ。だから能く場所馴れた人がどうぞ皆さん前へ寄つて下さいと言ふ。皆前へ寄つて呉れぬと話がしにくい。あなた方がおやりになりましても離れて居ると暗示享受性が起らない。是は群衆心理の一原則である。だから皆一緒に居られないと思ひの傳播性がない。皆一緒に居る爲にはすつと前に寄つて来させる。暗示といふのは強き觀念が弱き觀念を征服するのであります。講演者の強き觀念が聽くの弱き觀念を動して行く。青年指導の上に必要なのは、講演者の壓力が青年を動して行くことが強いことである。だから、諸君起て、諸君が今起たず

してこの日本がどうする。この力がグッと動いて行く。それには餘り離れて居つてはいけない。だから聽衆と演者とが近い程都合が好い所が地方に参りますと、どうもさう前へ御寄り下さらぬで遠慮して後の方へすつと座つて居られます。さうしてどうしても整理して呉れぬ折がありますと、私共仕方がありませぬから演壇をそつちへ持つて行きます。皆さんどうぞ御寄り下さい。寄らなければ私そつちの方へ行きますよと言つて行きます。それだけ言はないと地方の人は寄つて参りませぬ。殊に地方の非常識なる——此處にも地方の人が來て居られますが、外國の地方に行きますと非常識なることがあります。どうも昔の傳統的階級思想を残して居ります。一般の村民と村長は一緒に聽けぬといふので、村長、助役、收入役、校長、警察署長などといふのが横へ並ぶ。さうして眞中に間隔を置いてずつと向ふに聽衆を置いて居る。この間隔が邪魔になつて壓力を妨げる。かういふやうなことは成るべくやらぬやうにす。會社や工場などに行さますと能くあります。職工と重役は一緒になれぬといふので、重役は横に置いて職工を前に座らせて居る。どうかあなた方もこつちに座つて下さい。私はこつち向とあつち向と話が變へられぬから一緒に座つて下さい。一緒に座らすといふことがどの位労働者や職工の心を和やかにするか分らぬ。その時だけでも一緒に座らせる。さうすると怒つて行く者があります。さういふ者はもう駄目です。縁なき衆生は度し難い。だから職工の前ではそんなことは言へませぬから、私はさういふやうな心得ではもう此處へ斷じて來ない。私が少し惡意を有つて居つたら労働者を煽動する最も好機會であつたが私はやらなかつたのであるから、それを諒として貰ひたいといふやうな工合に言ふのであります。實際一緒に座はるといふことは意思を通ずることであります。さういふことを考へて餘程時と場合に依つて變つて行くであります。

この話の方や會場に依つて壓力を與へますのは、それは講演の仕方、雄辯の力でありますけれども、更にその基礎

を成すものは講演者の人格の力であります。同じ話をしましても、その人の口から聽きました折に多大の感を有つてあります。それは少くともその言はんとする思想とその人の人格とが一致して居らなければ役に立たぬ。禁酒演説をした歸りに晚酌をやつたといふやうなことでは役に立たぬ。社會教育は社會へ全身を出して居るのでありますからその人は皆が見て居ると思はなければならぬ。それを、禁酒演説を堂々やつて歸らうかといふ奴は役に立たぬ。それは外の演説の折には御勝手でありますけれども、その言はんとする問題はその人格とは一致して居らなければならぬ。私は能く言ふ。伊藤博文公の如き政治家に政黨の話を聞く時は喜んで聞く。併ながら伊藤博文公から風俗改良の話を聞くとなると吾々は耳を掩うて去るの外はない。それはその人の人格と合致しないからであります。だから何が力であるかと言ふと人格の力であります。殊に地方に於て青年を指導する人は、その青年の眞直中に自己があるのであるから、その青年に見られて恥しくない人格、それが青年を指導して行く根本であつて、以上申述べました雄辯の如きは實に枝葉の問題であります。諸君は既に根本の人格のおありになるお方でありますから、枝葉の問題を茲に講習せられて是から青年指導の参考になれば幸である。ならなくとも致し方ないのでありますが、このならないやうな話からなるやうに取出すのが所謂人格ある人の行ひと考へます。（拍手）

昭和十年七月二十五日印 刷

編 者

文部省社會教育局

大賣捌所

有所權作書

法讀朗と法話

付 奥

【錢拾八圓貳金價定】



發行者

永田與三郎

印刷者

永 耕 作

發行所

東洋圖書株式合資會社

東京 東京市神田區神保町一丁目六十七番地  
大阪 大阪市南區内安堂寺町一丁目二十八番地

振替大阪三九五五六番・電話(94)二八六八番  
振替東京一〇三七番・電話(25)三七四四五番

東京文藝堂、東京文館、盛文館、東京堂、名古屋文庫、京都文庫、大阪文庫、堺文庫、川瀬・尾野・愛知文庫、東京・長崎・京都・大阪文庫、京都書店、大阪書店、神戸書店、東京書店、神戸松屋書店、大阪松屋書店、北陸新報社、富山松屋書店、大阪松屋書店、大阪精興社、大坂精興社、大阪丸善、大坂丸善、大阪堂島、京都堂島、大阪堂島、京都堂島、大阪堂島、京都堂島、